

## 「のだ／のです」と「よ／ね／か」 — 2種類のモダリティ形式の関わり方 —

How “-noda”, “-nodesu” and “-yo”, “-ne”, “-ka”  
are related as modality forms

池田 英喜

---

“-noda” and “-nodesu” are modality forms that put fact-report mode sentences into explanation mode ones.

It is raining. (No further information or no implication=fact-report mode)

It is raining. (So we shouldn't go out now. Not mentioned but implied=explanation mode)

What happens if they appear with some special sentence ending particles; “-yo”, “-ne”, “-ka” and how we should introduce them to beginner level of Japanese learners.

---

【キーワード】ムードの「のだ」、話し手の認識、聞き手の認識

### 研究の発端

新潟大学のゼロビギナー対象初級日本語クラスで使用している教科書『げんき I (第2版)』の中の会話文に目を通していたところ、そこにあった会話にちょっとした違和感を覚えた。もちろん初級者対象の教科書なので、可能な限り自然な会話を採用していても、多少の無理がそこに露見してしまうのは仕方がないことは承知している。だからここでは教科書を批判しようと言うつもりはない。ただ、自分の感じた違和感の原因が何なのかについて、考えてみた。

私を感じた違和感のある会話を以下に紹介する。

メアリー： ただいま

お父さん： おかえりなさい。映画はどうでしたか。

メアリー： 見ませんでした。たけしさんは来ませんでした。

お父さん： えっ、どうしてですか。

—以後略

『げんき I (第2版)』第4課 会話II (p102) より

「映画はどうでしたか。」というお父さんの質問に対して、「見ませんでした。たけしさんは来ませんでした。」は非常に唐突な感じがして不自然である。お父さんは「メアリーが映画を見た」ことを前提に、その中身についてどう感じたのかを質問しているのに、「メアリー」は「映画を見たかどうか」について返事をしているからである。この質問と答えのズレを解消するためには、「(じつは) 見なかったんです。たけしさんが来なかったんです。」と「メアリー」は返事をしたほうがよい。その方が会話として自然になる。「じつは」というのを入れるかどうかは別として※1、「んです」という形にするべきである。ではこれがなぜ会話として自然な感じになるのだろうか。

以下は、先ほどの会話の続きとして紹介されている部分で、やはり私には違和感のある表現である。

メアリー： あっ、たけしさん。きのう来ませんでしたね。

たけし： 行きましたよ。

—以後略

『げんき I (第2版)』第4課 会話Ⅲ (p103) より

初級者の使える形での会話を目指した結果このようになるのだろうが、「来ませんでしたね。」では、相手の非を責めるようで、詰問調になってしまう。場面的には約束を守らなかった「たけし」を「メアリー」が非難していると考えても良さそうだが、テキストの場面設定としてはそこまで考えたものではなく、単に約束の場所に「たけし」が来なかったという事実を「メアリー」が「たけし」に伝えているに過ぎない。ではどうすれば、「メアリー」が「たけし」を非難していないように表現できるだろうか。「きのう来なかったんですね。」と、「んですね」を加えれば、単に事実を確認するような口調になるだろう。「メアリー」にはそれが何かはわからないが、「たけし」には何か正当な理由があり、だから「来られなかった」と伝えている形にした発話となるのである。

さらに課が進んでも同じようなケースが見られるので紹介する。

たけし： メアリーさんはかぶきが好きですか。

メアリー： かぶきですか。あまり知りません。

—以後略

『げんき I (第2版)』第9課 会話 I (p208) より

第4課の会話Ⅱ同様に、「かぶきが好きかきらいか」を問われているのに、「(かぶきは) あまり知りません。」と、ズレた返答をしているので違和感を感じるのである。「かぶきですか。

(じつは) あまり知らないんです (よ)。」と「んです (よ)」を加えて返答すべきところではないだろうか。

「のだ／のです」と「よ／ね／か」  
— 2種類のモダリティ形式の関わり方 —

以上、私が感じた違和感とその原因を紹介した。もちろん初級用の教科書の中で、「のだ」を含んだセンテンスの意味・機能やメカニズムといったものを説明するのは非常に困難なため、故意に避けて編集してあることは理解できる。最初にも述べたように、会話の不自然さの是非をここで問うものではないのだが、たとえ初級者にでも、できる限り自然な会話を導入し、定着させるためには、どういう工夫が必要かを考えてみたいと思ったのが今回の研究のきっかけである。

## 教科書での説明

この教科書では12課で「んです」を1文法項目として取り上げ、いわゆる「のだ」文を導入しようとしている。

みちこ： メアリーさん、元気がありませんね。  
メアリー： うーん。ちょっとおなかが痛いんです。  
みちこ： どうしたんですか。

※下線は筆者

—以後略

『げんき I (第2版)』第12課 会話 I (p206) より

以下に、この課での文法説明を紹介する。

There are two distinct ways to make a statement in Japanese. One way is to simply report the facts as they are observed. This is the mode of speech that we have learned so far. In this lesson, we will learn a new way: the mode of *explaining* things.

(日本語には、はっきりと違う2種類の発話モードがある。一つは見たままの事実をそのまま報告するモードである。このモードはこれまでこの教科書で私たちが学習してきたものである。この課では、新しい形：説明モードについて学ぶ。※訳は著者)

—中略

あしたテストがあります。 *I have an exam tomorrow. (a simple observation)*  
あしたテストがあるんです。 *I have an exam tomorrow. (So I can't go out tonight.)*

トイレに行きたいです。 *I want to go to the bathroom. (declaration of one's wish)*  
トイレに行きたいいんです。 *I want to go to the bathroom. (So tell me where it is.)*

—以後略

『げんき I (第2版)』第12課 文法 1 ~んです (p270) より

よく言われるように、「のだ」を日本語での説明文の形として紹介しようとしている。では、説明とは一体何であろうか。野田(1997:104)の、対人的ムードとして「話し手が認識している事を聞き手に認識させるように提示する。」がいわゆる説明に相当するのではないかと思う。ちなみに手元にある国語大辞典『言泉(第1版)』で「説明」を引けば、

【説明】ある事柄の内容、理由、意義などを、よくわかるように述べること。解説。

とある。また、『大辞林(第3版)』でも、

【説明】よくわかるように述べること。ときあかして教えること。

とあるので、どうやら「説明」には聞き手が「わかる」ということが必要な要素らしい。一応ここでは「説明する人は説明を受ける人が知らない情報について、説明を受ける人が納得できるような形で情報を提示する。」という行為と定義しておきたい。

では、どうすれば説明を受ける人が納得できる形での情報提供が可能になるだろうか。はっきりと述べているわけではないのだが、先に紹介した「のです」の例文の中に、そのヒントが隠れている。説明に用いられた2つの例文を再掲する。

あしたテストがあるんです。 *I have an exam tomorrow. (So I can't go out tonight.)*

トイレに行きたいんです。 *I want to go to the bathroom. (So tell me where it is.)*

カッコの中が問題なのだが、「あしたテストがある」という事実、「トイレに行きたい」という事実に加えて、「だから今夜出かけることができない」「だからトイレがどこか教えてくれ」と、あたかも事実の裏に隠れた情報(implication)こそが大切だと伝える形なのではないだろうか。さらにくわえて、上記の2つの例文は英訳から、話し手からの情報発信であるという前提のもとで説明がなされていることがわかる。しかし、聞き手から先に情報を受け、

そう、あしたテストがあるんだ。 *So there will be a test tomorrow.*

そう、きみトイレに行きたいんだ。 *So I have to find a bathroom for you.*

とでもいうような場合でも同じ発話をするのが容易に考えられる。ここで考えるべきは、「あしたテストがある」「トイレに行きたい」という情報が、そもそも誰から発信されたものかということである。ここでは、扱うべき情報が話し手からの発信ではなく、聞き手からの発信であることによって、教科書にあった例文とはその意味が異なっている。

そこで、「情報のありか」が異なれば、「のだ」文の示す意味も異なるという点で、著者は終助詞「よ／ね／か」との組み合わせを考えてみたくなったのである。情報が話し手にあるのか聞き手にある(と話し手が想定している)のかによって、使い分ける終助詞「よ／ね／

「のだ／のです」と「よ／ね／か」  
－ 2 種類のモダリティ形式の関わり方－

か」との組み合わせを考えてみることは、仮に「のだ／のです」が、「情報を説明モードにして提示する」のがその基本的機能だとして、聞き手に対する情報提示のあり方を左右するこれら 3 種の終助詞との共起には、深いつながりがあるということが予想できる。そこで次節では「のだ／のです」と「よ／ね／か」を組み合わせて考えてみたい。

### 「よ／ね／か」の機能の確認

終助詞「よ」にも聞き手が認識していない事態を話し手が認識しており、それを聞き手に対して情報として提供するという機能がある。話し手と聞き手の認識という観点から説明すると、終助詞「か」は逆に、話し手が認識していない事態を聞き手が認識していると話し手が考えており、話し手はその事態を聞き手から情報として入手しようとする機能、あるいは聞き手を想定しない場合には、話し手が認識していなかった事態を話し手の外部からもたらされた情報により認識するに至ったことをあらわす機能がある。一方終助詞「ね」には話し手と聞き手が同じ情報を共有していると話し手が認識している場合に、話し手が聞き手に対して同意を求める機能がある。

ここまでは聞き手と書いてきたが、対話として分析する場合、いわゆる聞き手が必ずしも聞いているばかりとは限らないので、本稿では対話を成立させる主たる人間を話し手、従たる人間をコミュニケーションパートナー（以下、パートナー）と表現することにする。

以下では、ある事態についての情報認識が話し手側にあるのか、パートナー側にあるのかについて場合分けした上で考察を進める。

これ以降、「のだ」を伴う場合には「(+) のだ」、伴わない場合には「(-) のだ」とし、同様に「です／ます」を伴う場合には「(+) 丁寧」、伴わない場合には「(-) 丁寧」、パートナー目当ての終助詞「よ／ね／か」を伴う場合には「(+) パ」、伴わない場合には「(-) パ」として表示し、区別した。

ケース 1：パートナーが求める情報を話し手が持っている（もしくは持っている可能性がある）と、パートナーが認識している場合に起こりうる会話

P：ここに置いてあったケーキ、知らない。

S：そのケーキなら、私が…

※これ以降 P はパートナー、S は話し手を示す

(-) のだ

食べた：(-) 丁寧、(-) パ／食べたよ：(-) 丁寧、(+) パ

食べました：(+) 丁寧、(-) パ／食べましたよ：(+) 丁寧、(+) パ

(+) のだ

食べたんだ (-) 丁寧、(-) パ / 食べたんだよ (-) 丁寧、(+) パ

食べたんです (+) 丁寧、(-) パ / 食べたんですよ (+) 丁寧、(+) パ

「のだ」を伴わない場合、「そのことの責任を私に問うつもりかい」といったニュアンスがあり、「食べたことは食べたけれど、自分には非はない」と言いたげな発話に聞こえる。一方「のだ」を伴う場合、そのことの責任が自分にあることを知っていて、確信犯的な発話に聞こえる。

ケース 2 : 話し手には情報がなく、パートナーが情報を持っていると話し手が認識している場合

S : ここにあったケーキ、君が…

(-) のだ

食べた : (-) 丁寧、(-) パ : 尋問 / \*食べたか : (-) 丁寧、(+) パ

食べました : (+) 丁寧、(-) パ : 尋問 / 食べましたか : (+) 丁寧、(+) パ : 尋問

(+) のだ

食べたんだ : (-) 丁寧、(-) パ : 納得 / \*食べたんだか : (-) 丁寧、(+) パ

?食べたんです : (+) 丁寧、(-) パ / 食べたんですか : (+) 丁寧、(+) パ : 質問

「のだ」を伴わない場合には、質問というより問い詰める感じが強く、尋問といったニュアンスに近づく。警察での取り調べといった感がある。一方「のだ」を伴う場合は、終助詞がなければ何かを納得したような感じ、終助詞があれば、特別なニュアンスのない自然な質問という感じがする。質問というより確認に近く、あくまで話し手がパートナーに事実を知るために質問している感じがする。※<sub>2</sub>

また、動詞に直接「か」をつけても通常会話で用いられるいわゆる質問形を作ることはできない。「食べたか」という形が使えるのは、明らかに話し手がパートナーよりも上の立場にいる場合であり、質問というよりも有無を言わず回答させる、ある種の命令の様な感じになる。

ケース 3 : 話し手とパートナーが、同じ情報を共有していると、話し手が認識している場合

S : ここにあったケーキ、君が…

(-) のだ

?食べた : (-) 丁寧、(-) パ : 疑念 / ?食べたね : (-) 丁寧、(+) パ : 疑念

「のだ／のです」と「よ／ね／か」  
－ 2種類のリテリ形式の関わり方－

?食べました：(+) 丁寧、(-) パ：疑念／食べましたね：(+) 丁寧、(+) パ：詰問  
(+) のだ

食べたんだ：(-) 丁寧、(-) パ：確認／食べたんだね：(-) 丁寧、(+) パ：確認

?食べたんです：(+) 丁寧、(-) パ／食べたんですね：(+) 丁寧、(+) パ：確認

「のだ」を伴わないと、話し手がパートナーに対して疑念を抱きながら発話している感じがある。それに丁寧形と終助詞「ね」を伴うと、ただ疑念を抱いているのではなく、話し手が事実を確信しながら、なおもパートナーの口から直接その答えを聞き出そうと詰問しているかの様な印象を受ける。一方「のだ」を伴うと、丁寧形を伴おうが、終助詞「ね」を伴おうが、話し手はあくまでパートナーに事実を確認しようとしているだけだという姿勢が感じられる。同様に「のだ」を伴わないと、より相手を責める感じがするような例はほかにも見られる。たとえば、喧嘩をしていて相手を責めるような場面を考えてみよう。

(-) のだ

こうなったのはあなたのせいでしょ (=せいですよ)。女

こうなったのは君のせいだよ。男

(+) のだ

こうなったのはあなたのせいなんですよ (=せいなのですよ)。

こうなったのは君のせいなんだよ (=せいなのだよ)。

「のだ」を伴わないと、情報を対話の現場で入手した感じがし、情報を入手したその場で相手を非難、叱責する感じがする。一方「のだ」を伴うと、情報を対話の現場以外から入手したような感じがし、冷静に相手の非を咎めている感じがする。だから、以下の例に示すような文(下線部)が前後に続きやすい。

あの人に聞いたけど、こうなったのはあなたのせいなんですよ(=せいなのですよ)。

こうなったのは君のせいなんだよ。もう忘れたのかい。

あの人に聞いたけど、こうなったのはあなたのせいですよ。

こうなったのは君のせいだよ。もう忘れたのかい。

「のだ」を伴わない場合、いずれも2文の連続性に不自然さを感じるのだが、多分それは私だけではないだろう。

ケース4：話し手が、ある事態についての情報を認識していないで、パートナーがその情報を認識している場合

この場合、パートナーから情報が提供されるので、起こりうる会話を以下のように設定してみる。

P：明日は雪です。

S：へえ、明日は…

(-) のだ

\*雪だ：(-) 丁寧、(-) パ/\*雪だね (-) 丁寧、(+) パ

\*雪です：(+) 丁寧、(-) パ/\*雪ですね (+) 丁寧、(+) パ

(+) のだ

雪なんだ：(-) 丁寧、(-) パ/雪なんだね (-) 丁寧、(+) パ

\*雪なんです：(+) 丁寧、(-) パ/雪なんですね (+) 丁寧、(+) パ

「そうか、気をつけよう。そうか、きっと寒いだろうね。」といった情報が暗に示されている。自分からの発話ではないので、前述のような「じつは」ではなく、「ほんとに」を加えて理解できるようにも思える。

S：へえ、ほんとに明日は 雪なんだ/雪なんだね/雪なんですネ。

ケース3とケース4に共通しているのは、「のだ」を伴っても、パートナー目当ての要素が優先権を持ち、パートナー目当ての要素がない場合には、丁寧な形を伴ってはならないという組み合わせになっている点である。

「のだ」の基本機能は「説明」とであると仮定すると、「説明」というのは必ず対話のパートナーに対して行う行為である。そうすれば、丁寧さやパートナー目当てといった何らかの機能が一緒に用いられなければならないというルールがあってもおかしくはない。本稿ではそのルールが何かというところにまでは迫れなかったため、この点は今後の課題としておく。

注

※1：田野村（1990）は、こういったことを背後の事情・実情を表すとし、「のだ」の基本的な意味・機能としている。

※2：ここでは、「か」で終わるものはすべて上昇調の音調を伴うものとする。下降調で発話される場合もあるが、その際には必ずしもパートナーに向けての発話ではなくなってしまうからである。



「のだ／のです」と「よ／ね／か」  
— 2種類のモダリティ形式の関わり方 —

【引用文献】

- 『初級日本語 げんき I 第2版』(2012) The Japan Times  
『国語大辞典 言泉 第1版』(1986) 小学館  
『大辞林 第3版』(2006) 三省堂

【参考文献】

- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』(p237-P251)、スリーエネットワーク  
池田英喜 (2011) 「終助詞「ヨ・ネ・ナ・カ」の組み合わせ —出現頻度から考える—」  
新潟大学国際センター紀要 第7号  
片桐恭弘 (1997) 「終助詞とイントネーション」『文法と音声』(p235-p256)、音声文法研究会編 所収、くろしお出版  
小山哲春 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」『文法と音声』(p97-p119)、音声文法研究会編所収、くろしお出版  
佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』第3部 「こと」「の」「のだ」、ひつじ書房  
杉藤美代子 (2001) 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」『文法と音声Ⅲ』(p3-p16)、  
音声文法研究会編所収、くろしお出版  
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』、和泉選書  
野田晴美 (1997) 『「の(だ)」の機能』日本語研究叢書9、くろしお出版  
益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』、くろしお出版  
森山卓郎 (2001) 「終助詞「ね」のイントネーション —修正イントネーション制約の試み—」  
『文法と音声Ⅲ』(p31-p54)、音声文法研究会編所収、くろしお出版

